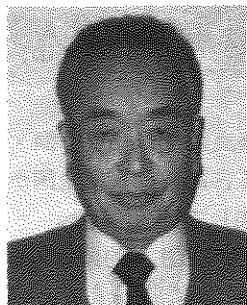


栃木県中学校長会報



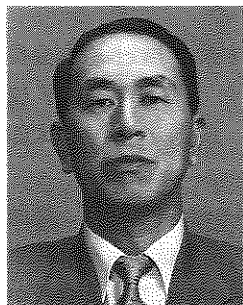
的確な現状 把握と対応

栃木県中学校長会副会長
南河内町立第二中学校
校長 野口 政重

昨年11月23日の毎日新聞の「余録」で、「 $1 \times 1 = 1$ 」の意味を自分の言葉で説明させたりするドイツの小学校の学習の例や「ジョージ・ワシントンは、米国の初代の大統領であった」と「ジョージ・ワシントンは、米国の最も偉大な大統領であった」の二つの文について、どちらが事実の記述でどちらが意見の記述なのかを考えさせたりするアメリカの小学校の学習の例が紹介されていた。子供のころから、常に身の周りの事柄に対して、正しく解釈したり、的確に判断したりできる能力の育成に力点を置いている欧米の教育の在り方の一端に触れ、子供の教育に直接携わる者として、一瞬目から鱗が落ちたような感じを覚えたのである。

現在の日本の教育界は、急激な社会の変化への緊急かつ的確な対応が迫られ、それぞれについて各方面から様々な提言や意見が寄せられているのが現状である。しかし、これらの提言や意見を何の脈絡もなく個々別々に日常の教育活動に取り入れようとするのは、決して得策ではなく、かえって学校現場に混乱を招くだけである。急激な社会の変化の下、中等教育の前期3か年間の義務教育の中で、何をどう変えていくべきなのかを真に問われる時代になってきているように思われる。

現実を直視し、的確な現状把握の下に、自分の学校では何を中核として、どのような体制・組織で、子供たち一人一人に個性的・創造的な「生きて働く真の学力」を身に付けさせようとするかを真剣に議論し、具体策を模索したいものである。



この頃思うこと

栃木県中学校長会副会長
氏家町立氏家中学校長
校長 豊田 實

少し古い話ですが、隆矢洋子さんという国立市に住む方が、招かれて中国へ行った時のことです。ある日、気晴らしに町を散策している折りに、タンザニアから来ている留学生と知り合いになりました。彼らと話をしているうちに、如何にアフリカを知らなかったかを思い知らされました。それどころか、「暗黒大陸」という暗いイメージを持ち続けていた自分が、恥ずかしくさえなかったそうです。目の前にいる彼らは底抜けに明るく、希望に輝いて見えたからです。

そのことがあって、翌年娘を連れてタンザニアとケニアを訪れることにしました。移動はもっぱらバスを使いましたが、朝来る筈のバスで昼頃になって来るといったことはしょっちゅうで、ガソリンがきれたから今日はこれでおしまいということもありました。でも、そのたび毎に、沿道の人たちはいつも食事に誘ってくれたり、時には一夜の宿を提供してくれたのです。人々は貧しいのに、何故にこれほど心優しく親切なのだろうか、旅の間中ずっとそのことが頭から離れなかったといいます。それからは、毎年ようにアフリカ諸国を旅するようになったそうです。

今は亡き作家の司馬遼太郎は、「人」という文字を見ると非常に感動したといいます。共に支え合って生きていくところに人間のすばらしさがあり、人という字はそれを如実に表しているからに他なりません。何が隆矢さんをアフリカへ引き付けたのか、改めて心の教育の大切さを考えさせられる今日この頃の心境です。



栃木県中学校長会副会長
足利市立第一中学校
校長 岡崎 龍太郎

春植物

雑木林は、夏になると葉をいっぱい広げ、地面にはあまり日光が当たらなくなります。そこに生えることの出来る植物は、光が弱くても光合成が出来る、日陰植物だけです。しかし、まだ樹木が繁らない春先は、地面に太陽がいっぱい当たります。そんな時をねらって花を咲かせるのがセブンソウです。

まだ、寒く虫の少ない早春に、葉を落とした明るい雑木林の中で、よく目立つ花を咲かせて虫に花粉を運んでもらい、種子を作り子孫を残します。そして、春の陽を一杯に浴びて光合成を行い、栄養分を地下に貯え、木の葉が繁り地面に光が当たらなくなると、地上から姿を消します。

生育期間がわずか3か月ですから成長は遅く、種子がこぼれ発芽するのは次の年、たった1枚の楕円形の葉をつけます。翌年には切れ込みのある葉を出しますが、花が咲くのは更に1~2年後です。

このように雑木林に適応した植物のことを「春植物」といいます。春植物の仲間がよく栽培されるのはチューリップ。栃木県の山ではアズマイチゲ、カタクリなどがあります。

これらは皆、背丈の割に大きな美しい花を咲かせます。虫達の活動が少ないこの時期、よほど目立つ花を着けないと虫に花粉を運んでもらえないからです。

気温は高くても光の少ない夏、枯葉が地面を覆ってしまふ秋、寒さの冬。どれをとっても、小さな草には良い条件ではありません。そんなときはじっと我慢をして春の光が射すのを待っている。何か、人間の生き方を教えてくれるようです。

第47回全日本中学校長会研究協議会奈良大会に参加して

事務局長 川原 宗司 (宇・姿川中)

第47回を迎えた全日中奈良大会が、10月24・25日の2日間「秋も深まる古都奈良」に全国から2,404名の中学校長が参加して開催された。

前年に引き続いて「学ぶ意欲と主体的に生きる力を育てる中学校教育」を研究協議会として掲げこれからの中学校教育の方向や在り方について熱心に研究発表や研究協議が行われた。

第1日の開会行事では、吉村喬大会実行委員長の歓迎のあいさつ、全日中佐野金吾会長からは、「社会の急激な変革の中で、中学校教育が当面する課題を真剣に受けとめ各学校で校長としてどう取り組むべきか、何をなすべきかを研究討議されその成果が各都県の中学校教育の改善に反映されることを願っている」とのあいさつがあった。続いて、文部省、県知事、奈良市長、県教育長等多数の来賓の方々から激励と祝辞をいただいた。

全体協議会では、全日中から「生きる力を育む中学校教育」題して、清宮宏文教育情報部長の本部提案と、徳島県勝浦中学校長福良健先生から「活力を育む開かれた学校経営を目指す創造と実践」題して、実践を踏まえた地区提案があった。アトラクションとして、南都楽所による春日舞楽の代表作「蘭陵王」が披露され、参観者の心をなごまかせてくれた。午後は8分科会での提案と研究協議が持たれ活発な意見交換がなされた。

第2日目は、文部省中学校課長鴨川先生から「中学校教育における諸問題」と題して、「第15期中教審のまとめ」を基に学校が当面している諸問題についての具体的な説明があった。

全体会では、分科会の報告、大会宣言文の決議がなされた。最後に「思春期の心性について」と題して、京都大学名誉教授河合隼雄先生の記念講演があり、感銘を受けながら、全日中奈良大会が盛会のうちに、多大の成果を残し無事終了した。

研究学校発表概要

平成7・8年度 文部省・県教委・市教委指定
同和教育研究学校

「人権を尊重し、自ら考え行動できる生徒の育成」

小山市立乙女中学校長
福田 弘剛

1 はじめに

現在大きな社会問題になっているいじめ問題などを人権に関する視点からとらえ、「いきいき栃木っこ3あい運動」と関連を図りながら、地域の実情及び生徒の実態を踏まえ、研究主題を決め、これに迫るために「生徒に伸びてほしい能力や態度」を設定した。そして、研究組織をつくり、下記の4つの部ごとに作成した研究課題をもとに全教科等を通して同和教育の視点に立った授業の工夫・改善に取り組んだ。特に社会科と道徳・特別活動との連携を図った「連携学習プラン」を通しての直接的指導の学習効果の向上に努めた。さらに、生徒・保護者に対する啓発活動及び教職員の人権感覚を磨くための研究等も工夫を重ねた。

2 研究の実際

(1) 教科研究部

① 研究課題

科学的・合理的なものの見方・考え方を育て、課題(問題)を深く追及能力・態度を養い、互いに支え合い、励まし合って、主体的に学習に取り組もうとする態度の育成

② 研究内容

ア 年間指導計画の見直し
イ 課題解決の学習の指導法の工夫・改善
ウ 間接的指導及び直接的指導の充実

(2) 道徳教育研究部

① 研究課題

日常生活の中にある偏見や差別を自己の問題としてとらえ、解決しようとする心情・意欲及び実践力の育成

② 研究内容

ア 年間指導計画の見直し
イ 指導過程の工夫・自作資料の開発

ウ 連携学習プランの取り組み

(3) 特別活動研究部

① 研究課題

集団の一員として、互いの人権を認め合い、助け合い、励まし合って、主体的に活動しようとする意欲と態度の育成

② 研究内容

ア 学級活動の充実
イ 学校行事における体験的活動の充実

(4) 調査・啓発部

① 研究課題

生徒・保護者・教職員の人権に関する意識の実態を把握し、社会の中に存在する偏見や差別に気づき、積極的に解決しようとする意欲の高揚

② 研究内容

ア 人権意識の把握
イ 啓発活動の工夫

3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果(生徒の変容のみ掲載)

① 日常生活や生徒の活動における教職員の働きかけを通して、人権感覚や人権意識が高まり、身の回りの偏見や差別に敏感になり、その不当性や不合理性に気づく生徒が増えている。

② 連携学習を通して、同和問題に対する科学的認識が深まり、偏見や差別を許さないという心が育ち、積極的に解消しようとする態度が見られるようになった。

③ 生徒を主体とする授業やその他の活動を通して、活動の意欲が高まった。

(2) 今後の課題

① 生徒や保護者の意識を常に把握し、実態に応じた支援の在り方をさらに工夫したい。

② 生徒の人権意識をより一層高め、いじめ等の根絶に努めたい。

③ 連携学習の内容や方法について工夫・改善し、直接指導をより一層充実していきたい。

④ 保護者の同和教育に対する意識をより一層高めるための啓発活動や教職員の人権感覚をさらに磨くための研修を推進していきたい。

「豊かな心を持ち、よりよい 生き方を求める道徳教育」

栃木市立吹上中学校
校長 竹田 安男

1. 研究の実際

研究主題「豊かな心を持ち、よりよい生き方を求める道徳教育」の実現に向けて、生徒のよりよい道徳性を育成するために、次の3つの視点より仮説を立て、その検証をしてきました。

① 道徳の授業充実を図る

仮説1

自己を見つめ、素直に自己を表現する道徳の授業を継続的に実践することによって、道徳的实践力が高まるであろう。

仮説検証のための視点として

ア 自己を見つめる工夫。

イ 素直に自己を表現する話し合い活動の充実を掲げて、研究を推進する。

この2つをより深めるための具体策として、次に示した点を研究重点事項とした。

・「自己を見つめる」資料の選び方と生かし方

・「自己を見つめる」発問の工夫

・「素直に自己を表現する」話し合い活動の充実

・板書の工夫、指導案の形式の改善と工夫

・指導過程の基本及び指導方法の定着化

② 道徳的实践への推進を図る

仮説2

「いぶき運動」とは、県の教育活動「いきいき栃木っこ3あい運動」の趣旨を受けての本校独自の豊かな体験活動全体をいう。

「いぶき運動」は、自己を見つめる場としても考えられ、道徳的实践の場、道徳的实践力を培う場として捉えてきた。道徳の時間と密接に関連してきている。

「いぶき運動」の内容は、生徒会活動、地域活動、学校行事、教科等の4つの柱として学校教育活動全般にわたっている。また、次の生徒会活動スローガンを掲げ、本校独自の活動を展開している。

〈スローガン〉

「い」つもさわやか、明るいあいさつ

「ぶ」活動、輝け青春、育てよ友情

「き」れいな学校、誇れる母校

③ 家庭や地域社会に根ざした道徳教育の推進を図る。

仮説3

保護者や地域の人々との連携を深め、ふれあいの場をもつことによって、社会的な責任が身に付くであろう。

学校と家庭及び地域社会がそれぞれの役割を理解し、協力し合いながら、生徒たちが豊かな道徳性を身に付けてほしいことを願って、次の活動を行っている。

・啓発活動（学校だより、授業参観等）

・地域活動（クリーン作戦、廃品回収、職場体験学習、地区体育活動等）

・PTA活動（授業参観などの学校行事への参加、環境整備、わが家の「いぶき運動」等）

2. 研究の成果と今後の課題

研究の成果として、本校生徒の変容が次のように見られた。

① 心が豊かになり、人や物に対して愛情をもって接することができ、お互いに認め合いよりよい人間関係が育成されつつある。

② いぶき運動の展開によって、活気にあふれ、躍動する生徒の姿が見られるようになった。また、学校・家庭・地域社会との関わりが深まり、社会的に責任感を持てるようになった。

今後の課題としては、「いきいき栃木っこ3あい運動」を更に深化・拡充させ、それと関連づけて道徳教育を推進し、心豊かなたくましい生徒の育成に努めることと考えている。

平成8年度 各専門部活動報告

☒ 調査部

部長 高橋 雅義 (宇・星が丘中)

調査部は、前年までに引き続き全日中教育情報部と共同して「中学校教育に関する調査」を平成8年6月に実施しました。内容は次のとおりです。

- (1) 公立中学校の学校数・学級数・生徒数・教員数の増減状況に関する調査
- (2) 平成8年度教育費（都道府県負担分）に関する調査
- (3) 中学校の学級数別教員定数に関する調査
校教員の需給状況に関する調査
- (4) 中学校教員の需給状況に関する調査
- (5) 教員に対する都道府県教委の異動方針に関する調査
- (6)～(8) 教員待遇、旅費、資質向上に関する調査
- (9) 担当教科数・免許外教科担当に関する調査
- (10)～(11) 高校入試制度等、及び、中学校の教育課程に関する調査
- (12) 中学校長の退職に関する調査
- (13) 校長・教頭の選考制度等に関する調査
- (14)～(15) 中学校長待遇、年齢別人数に関する調査
- (16) 中学校に設置する特殊学級に関する調査
- (17) 学校給食に関する調査
- (18)～(19) 寄宿舎、へき地の学校教育に関する調査
- (20) 生徒指導対策費に関する調査

以上の調査実施にあたっては、県教委義務教育課人事係の資料提供と協力もいただきました。

なお、(9)担当教科数、免許外教科担当状況に関する調査 (イ)一人当たり担当教科数 (ロ)免許外教科担当 については、各地区調査部員の方々に調査をお願いし、集計の上報告をいただきました。内容の詳細については、平成8年9月全日中発行の「平成8年度中学校教育に関する調査」報告書を御参照ください。

更に、他県からの教育予算等に関する照会について、県教委義務教育課人事係の資料提供等をいただき回答いたしました。

☒ 研修部

部長 伊澤 哲夫 (宇・晃陽中)

- 1 第一回研修会（6月3日）教育会館
 - (1) 平成8年度役員・組織
 - 部長 伊澤 哲夫 (宇・晃陽中)
 - 副部長 渡邊 康弘 (那・那須中)
 - 副部長 御子貝 久志 (上・北押原中)
 - (2) 研修活動計画の設定
 - ・研究主題 学ぶ意欲と主体的に生きる力を育てる中学校教育
 - ・副主題 生徒一人一人を生かした教育活動の推進
 - ・重点課題と研究の視点
- 2 第二回研修会（6月25日）教育会館
 - (1) 第18回県中学校長会研究大会の企画
 - ・3地区の発表・分科会・講演会の持ち方
 - ・大会日程細案・役割分担
 - (2) 研究収録19集の編集方針・執筆要項の確認・基本計画
- 3 第三回研修会（8月19日）教育会館
 - (1) 第18回研究大会細部打ち合わせ・諸準備
 - (2) 研究収録執筆要項の再確認・執筆分担
- 4 第18回県中学校長会研究大会（9月10日）
 - 於：県子ども総合科学館
 - (1) 開会行事：会長あいさつ・来賓祝辞
 - (2) 全体会：今年度の重点研修課題・3地区発表
 - (3) 分科会：芳賀・那須・足利地区の発表に基づく研究協議
 - (4) 講演会：演題「これからの学校教育」
講師 第15期中教審専門委員
中進 士先生
- 5 第4回研修会（12月10日）教育会館
 - (1) 平成8年度研究の反省・平成9年度研究基本構想（研究主題等）
 - (2) 研究収録19集の校正

編集 部

部長 琴 寄 忠 男 (栃・皆川中)

平成8年度の栃木県中学校長会報発行に当たっての編集部の構想、部会の開催、会報内容の概要等は次のとおりである。

1 平成8年度会報発行の構想

- (1) 会報は年2回発行する(85、86号)
ただし、内容はほぼ従来どおりとする。
- (2) 「地区だより」は、活動計画と活動結果を報告する地区が固定しないように年度ごとに入れ換える。
- (3) 後期号に専門部の活動報告を掲載する。
- (4) 85号、86号ともに12頁編集とする。

2 編集部会

第1回 平成8年6月3日(月) 教育会館

役員決定、本年度の編集方針の協議

第2回 平成8年6月24日(月) 皆川中

会報85号の内容、執筆者の選定、原稿依頼等

第3回 平成8年11月22日(金) 皆川中

会報86号の内容、執筆者の選定、原稿依頼、今年度の反省と次年度への改善点

3 会報の発行とその内容

(1) 会報の発行

年2回発行(第85号・第86号)

第85号 平成8年9月1日発行

第86号 平成9年2月1日発行

(2) 各号の内容

[第85号]

役員所感、各専門部の活動計画、退任にあたって(金子前会長)、関東甲信越山梨大会報告、新任校長の一言、地区だより、私の朝会訓話、お知らせ(関東プロ大会関係等)

[第86号]

役員所感、全日中奈良大会報告、専門部活動報告、研究学校報告(2校)、地区だより、海外視察報告

職員対策部

部長 関 谷 孝 (南那・烏山中)

平成8年6月3日(月)に部会を開催し、本年度の組織及び事業計画について協議しました。事業としては、福利厚生部との共催による「退職後の生活設計について」を主題とする研修会を実施することになり、計画通り実施しました。

なお、研究会の概要は次の通りである。

1. 主 題 「退職後の生活設計について」
2. 日 時 平成8年11月25日(月) 13:30~15:30
3. 会 場 栃木県教育会館
4. 参加者 会員約60名
5. 研修内容及び講師

(1) 医療保険について

〈県教委福利課副主幹兼資格係長 篠崎旭〉

- ・退職後の医療
- ・任意継続組合員制度
- ・継続療養制度等

(2) 退職手当について

〈福利課副主幹兼給付係長 伏木公夫〉

- ・退職手当の種類
- ・退職手当の計算
- ・各種課税

(3) 年金制度について

〈福利課副主幹兼年金貸付係長 鬼頭行尚〉

- ・年金の種類
- ・退職共済年金の内容と仕組み
- ・退職共済年金の支給等

(4) 教育福祉振興会「退職者部会」について

〈福利課主幹(部会担当) 篠崎一己〉

- ・退職者部会制度
- ・互助年金制度の概要等

なお、これら4つの研修内容の講話に先だち、福利課谷口靖男課長からあいさつがあり、全体的なご指導をいただき、講話後、質疑応答がありました。研修会には、退職を1、2年後にひかえた会員が多数参加され、意義ある研修ができました。

進路対策部

部長 川 原 宗 司 (宇・姿川中)

平成8年6月3日(月)県教育会館において、専門部会を開き、本年度の組織及び事業計画について協議し、次のように決定した。

本年度の事業計画

「中学校における適正な進路指導の在り方」を中心課題とし、各地区の意向を基に活動を推進する。主な内容として、①高校入試制度改善②高校教育制度改善等に関してどのような要望をしていくか。

◇ 第1回研修会

ア 期日 平成8年度7月1日(月)

イ 場所 栃木県学生協会館 会議室

ウ 内容 アンケート結果を地区より持ち寄り、次の内容について検討し、まとめた。

- ・中学校における適正な進路指導の在り方
- ・新しいタイプの学校・学科
- ・普通科、専門学科、総合学科の在り方
- ・県立高校、私立高校入試改善等について

◇ 第2回研修会(私立中学・高校連合会との協議)

ア 期日 平成8年9月17日(月)

イ 場所 栃木県教育会館 1階会議室

ウ 内容 私立高校入試制度の改善について県から総務部文書学事課の関先生、私立高校から、須賀連合会長と3名の副会長が出席

◇ 第3回研修会(県教委と協議)

ア 期日 平成8年11月22日(金)

イ 場所 栃木県教育会館 1階会議室

ウ 内容 県立高校の入試及び教育制度等の改善・その他について

県教委高校教育課から3名の先生が出席「中学校における適正な進路指導」と高校教育改革と連動しながら、中学校と高校の連携を図る方向で忌憚のない意見が交換が行われた。

修学旅行部

部長 大 塚 弘 (宇・若松原中)

平成8年6月3日に県教育会館において部会を開き、本年度の組織及び事業計画を協議しそれに基づいて活動を進めてきた。

また、本会は関東地区公立中学校修学旅行委員会(関修委)並びに全国修学旅行研究協議会(全修協)とのかかわりが大きいので、それらの研究団体と連携を図りながら活動を展開してきた。

- ・ 6月4~5日 平成8年度関修委総会並びに第1回研究協議会(茨城県袋田)
- ・ 6月10日 「平成8年度修学旅行実施報告書」を地区部長を通し配布
- ・ 6月27日 「平成10年度関西・東北方面修学旅行専用列車申込書」を地区部長を通し配布
- ・ 7月3日 関東・東海・近畿3地区公立中学校修学旅行委員会総会(岐阜市)
- ・ 8月7日 関修委臨時役員会、「平成8年度修学旅行実施報告書」提出、「平成10年度列車申込集計表」提出
- ・ 9月20日 第11回全修協修学旅行セミナー、第2回関修委研究協議会、近畿の旅編集委員会
- ・ 10月9日 平成10年度新幹線専用列車割り付け栃木・茨城合同会議(宇都宮)
- ・ 10月16日 第3回関修委研究協議会
- ・ 11月25日 「平成10年度関西・東北修学旅行新幹線輸送計画書」を地区部長を通し配布
- ・ 11月27日 平成9年度修学旅行「学習資料」(近畿の旅他)の見本と申込書、「平成10年度修学旅行了承書」を地区部長を通し配布
- ・ 11月29日 平成8年度第32回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会(千葉県市原市) 第4回関修委研究協議会
- ・ 12月4日 第13回全国修学旅行研究大会(名古屋)
- ・ 2月5日 関修委役員代表者会議(野田市)
- ・ 2月18日 第5回関修委研究協議会(東京)

☒ 福利厚生

部長 古田土 渡 (宇・陽西中)

平成8年度の福利厚生部の事業活動は、次のとおりであった。

1 「生徒手帳」編集会議、平8. 9. 7 (土)

- ・ 運動能力、体力診断テスト記録 (丸治ホテル)
- ・ 体位の学年別平均値
- ・ 県人口の動態
- ・ 村、町の確認等
- ・ その他改正すべき箇所

上記のことについて、会員が分担して作業に取り組む。

2 「退職後の生活設計について」平8. 11. 25日、教育会館にて実施

- ・ 医療保険について
- ・ 退職手当について
- ・ 年金制度について
- ・ 退職者部会等について

講師として県教委福利課から課長をはじめ各係の方々をお招き講話をいただいた。

(職員対策部との共済事業)

3 「新しい道」「中学生の安全」編集会議 平9. 2. 15、(丸治ホテル)

両テキストも内容的にみて改訂はなかった。
・ 本年度の事業の反省と次年度の事業計画。

☒ 生徒指導部

部長 真 船 淑 和 (宇・瑞穂野中)

1 研究課題『いじめへの対応』

生徒指導はこの課題にせまるため、本年度は特に地域とのかかわりという視点から各校または地域での実践例を出し合い、情報交換し、より良い連携の仕方を探っていくこととした。

実践例

(1) 学校と地域との連携の具体例

ア 地域連携推進協議会の開催

地区民生・児童委員、学区各PTA会長、学区各校長、駐在、育成会長、本校職員で構成され、教育の諸問題について協議。

イ 地区青少年非行防止連絡協議会での「いじめ問題の対策会」を実施

ウ 結社小中学校PTA指導者連絡協議会 結社地域(4小学校区)の情報からいじめの存在を浮かび上がらせる。

エ 町内(地区)懇談会の開催

保護者や地域の方々が主体、子どもの教育の在り方の意識を高める。

オ 民生・児童委員との懇談会

カ いじめについてのシンポジウム開催、小・中学校教師、保護者による。

キ 校内事例研究会の充実

学校アドバイザーを講師に事例研究会。

ク 各町内における「愛の巡回」の実施

各町内保護者全員で班をつくり町内巡視

(2) 地域住民への情報提供と啓発の具体例

ア 学級、学年だよりの工夫

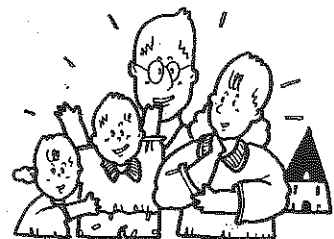
- ・ 「ふれ合いコーナー」設け、保護者からの意見、感想、要望をのせる場を設定
- ・ 「いじめシリーズ」を設け問題意識提起

イ P.T.A新聞の工夫

- ・ 市町村長、教育委員会等へ配布、学区内各町の班にも回覧。

- ・ いじめ問題への学校の取り組みや保護者の意見をのせる場を設定

ウ 各家庭のいじめのパンフレット配布



地区だより

本年度の研修活動の概要

宇都宮地区

宇都宮市中学校長会は、21名で構成されている。平成8年度は5名の新会員を迎え、泉が丘中学校の千本文雄校長を会長に新組織づくりがなされ発足した。定例研修会は年間7回持っている。

今年度の主な研修活動

○ 研究課題

本年度は河内郡も加わって合同で研修を行なうことになり、2年間の継続研究で今年はその初年度。校長は日頃から危機管理能力を身に付けておく必要があるという観点から「学校教育における危機管理のあり方」のテーマを設定した。研修部が中心となり、アンケートを実施し教職員の意識の実態と問題点の把握及び考察がなされた。

○ 宇河地区合同研修会(年2回)

6月14日 真岡市科学教育センター見学

ここでは、未来を担う真岡市内の小中学校の児童・生徒に、科学を通して夢と希望を与え豊かな知性と創造性を育み、科学する心を培うということで平成5年に竣工したもの。

最先端の設備が整えられており、これからの理科学習の指導のあり方に示唆を与えてくれた12月5日 文化財めぐり

この行事は研修の一環として毎年行っている。今回も講師には本市教育委員会文化課神野安伸指導主事を招き実施した。見学場所は土浦市立博物館、上高津貝塚等で土浦市の歴史、文化の一端に触れ見聞を広めることができた。

○ 中・高校長連絡会議(年2回)

宇河地区の中学及び高校の校長42名が参加し、進路指導に限らず、学習指導や生徒指導等についても話し合いがもたれた。特に2回目は昨年9月、清原中学校が文部省の指定を受けて発表した「学校と地域との連携を踏まえた進路指導はいかにあるべきか」について、説明があるなど、お互いの実情について理解を深め合うとともに、充実した研修を持つことができた。

これからの中学教育の在り方を求めて

上都賀地区

1 はじめに
本地区は、大橋寛鹿沼東中学校長を会長に32名で中学校長会を構成し研修している。年々若い会員が増え、研修意欲を高めている。

2 研修主題「生徒一人一人の自ら学ぶ意欲の高揚と主体的に行動できる教育活動の推進」

3 研修の概要

(1) 小中校長合同研修会 4月15日

半田賢治教育事務所長講話「新年度にあたって」は、学校経営に示唆を与えてくれた。

(2) 第1回定例研修会 6月27日、28日

- ・ 実践資料を持参し、3分科会で協議した。
- ・ 半田賢治教育事務所長講話「中学校教育の現状と課題」及び佐藤太毅夫鹿沼市教育長講話「中学校長に望む」を聞く。

(3) 県外教育事情視察

岩手県岩手郡松尾村立松尾中学校の研究「一人ひとりの学習意欲を高める学習指導の在り方」は、評判を生かしたもので、主体性を育てることを目指しているのがよかった。

また、「自然との共生」をめざして改築された木造の校舎は、広い敷地にゆったりと建てられており、「恵まれた自然環境と教育環境を生かした教育をめざしたい」という住民の願い通り、のびのびと素直な生徒達の笑顔が印象的であった。

(4) 第2回定例研修会 10月28日

今回も実践資料を持ち寄り、3分科会で協議した。学校経営の諸問題を本音で語り合いこれからの中学校教育の在り方を施行錯誤する苦しみを分かち合った。

(5) 第3回定例研修会 2月27日、28日

本年度の研究のまとめ、講演会

4 まとめ

本会の良さは実践研究の共有化である。意欲あふれる仲間たちと充実した1年であった。

研修活動の概要

栃木地区

栃木市校長会は7校で構成され、年間8回の定例研修会、2回の教育事情調査を行っている。

■定例研修会

本年度の研修テーマは、「時代の要請に応える教育の実現をめざして」であり、具体的には次の2点について、各校の実践内容や校長個人の考え・ビジョンをペーパーにまとめたものを持ち寄って、活発な意見の交換を行った。

- (1) 豊かな心を培い、たくましく生きる生徒の育成
- (2) 教職員の資質向上を図る指導・援助の工夫

本会は、ベテラン・中堅・若手のバランスがよくとれているので、それぞれの教育経験・人生経験に基づいた意見・考えを聞いたことは、校長としての識見を高めるのに役立った。

また、研究の成果は、市教育委員会を招いた小中合同研修会で発表された。市教委からいただいた講評は、来年度からの研修に生かしていきたい。

■県内教育事情調査

文部省指定道徳教育推進校（平成7年度～平成8年度）であった田沼町立東中学校を訪問して、研究内容と学校運営の在り方等を研修した。

■県外教育事情調査

文部省指定道徳教育推進校（平成6年度～平成7年度）であった鹿児島市鴨池中学校を訪問して、研究内容と学校運営の在り方等を研修した。

完全学校週5日制を見据えての地域運動会や地域立志の集い等、本県には例のない事例等についても学ぶことができた。

また、今春退職された2名の校長先生が同道してくださり、旧交を温めたり、やがて行く道への貴重なお話をお話を伺うことができた。

■「研修のあしあと」

1年間の成果を、「研修のあしあと」と銘打った小冊子にまとめて、研究の継続を期している。

研修活動の概要

小山地区

小山市校長会中学校部会は会員11名から成り、年間10回の定例会をもつ。会の内容は当面する課題についての協議、研修、連絡調整、市教育委員会の指示・連絡など多岐にわたる。

ここでは本年度実施した研修のうち其のいくつかを記述することとする。

〈課題研修〉

全小中及び県中の研究課題に沿った主題「個性を生かす教育を推進する学校経営」を設定し研究協議を重ねてきた。その成果を小中合同会議で発表し、さらに会議「研修記録」にまとめている。

〈講話〉

経営者としての校長の識見を高めることをねらいとして毎年2回の講話を実施している。本年度は5月に「学校経営について」退職校長から、9月には「身近な経済」と題して市内の金融機関からそれぞれ講師を招聴して講話を拝聴した。

〈学校経営実践事例発表〉

例年7月、小中合同会議で校長2年目（小2名、中1名）の校長が経営方針、その具体策、成果と今後の課題等について発表している。自校の経営を見直す好個の機会であるとともに小中の連携を図る上から極めて有効である。

〈県外教育事情調査〉

先進校の研究内容について調査研究し、自校の経営に役立てることを目的として毎年9月に実施している。本年は北海道滝川市立明苑中学校を訪問。「豊かな心の育成」を中心にした研究を視察し貴重な参考資料を得ることができた。また北海道の自然や文化に直接ふれることによって見聞を広めたり、会員相互の一層の親睦を深めるなど有意義な研修であった。以上、研修の概要を記したが各学校ともにそれぞれの地域の実情に即した教育活動を展開しつつ「小山は一枚岩」を合い言葉に校長としての力量、識見を高め合いながら明日を担う生徒の教育の推進に努力している。

研修活動の概要

下都賀地区

下都賀郡中学校長会は、南部4町7校と北部4町5校から成り、各々の学校が地域の特色を生かした学校経営をしている。平成8年度は本会のためにご尽力くださった先輩の方々が退会され、5名の校長が入れ替わり、都賀中宇賀神校長を会長に新組織づくりがなされ発足している。

本年度の事業計画の概要は次の4点である。

- (1) 研究テーマに基づく研究
- (2) 学校経営に関する情報交換及び連絡・調整
- (3) 各種研究会への参加
- (4) 県外教育事情調査及びその他の調査

本年度の研修テーマは「生徒一人一人が生きる学校生活の実現を目指す学校経営のあり方」とした。これは、本地区の石橋中が平成8・9年度の県の実験校として上記のテーマで委託された。

本地区の校長会としても同テーマで研究を進めることとし、月例校長研修会（年10回）の度石橋中研究の進行を核とし情報交換や討議を行い研究を進めた。また、下都賀地区教育懇談会の資料として各校でアンケート調査を行い「学校経営上の問題」についての共通理解を図った。さらに、月例校長会は各校順次に会場校とし研修を進めており、会場校の特色ある学校経営の在り方がたいへん参考になっている。

県外教育事情調査は、長崎県西大村中学校の視察を行った。本校は、昭和59年県と市より「生徒指導」の研修指定を受け61年に発表をしている。その後、市の指定による生徒指導の研究を毎年行い、学校課題は一貫して生徒指導を取り上げており成果を上げている。平成6年度文部省より「地域指定生徒指導」の研究指定された学校であり、十二分に研修を深めることができた。

また、長崎おくんち、美術館、有田の柿右衛門窯、柳川と北原白秋記念館等の視察を行い、異なる地域の自然や歴史、文化に触れて見聞を深める旅は、親睦を図る上にも有意義であった。

21世紀の教育をめざして

那須地区

本地区中学校長会は26校で構成され、黒磯中の佐藤秀夫会長の強力なリーダーシップのもとに来るべき21世紀の教育を見据えた教育実践に意欲を燃やしている。

変動する社会の中で、中学校教育をどり位置づけるか、生涯学習社会における中学校教育の役割などが会員諸氏の話題である。

本年度の研修主題「学ぶ意欲と主体的に生きる力を育てる中学校教育」を設定、サブテーマとして「学校週5日制の推進と新しい学校運営」の継続研究を行うことを確認し、研修を進めてきた。

従来、本会では、学校週5日制への対応の研究を積み重ねてきたが、再度これからの時代を生きる子供たちが必要とする能力や資質を育成するためには、学校教育はどうあるべきか、に視点をあて、各市町村校長会研修部を中心として検討し、まとめあげたものを11月12日、恒例の那須地区小中学校長全体研修会で発表した。

各地区から具体的な資料に基く発表、熱気溢れる討議がくりひろげられ、率直な意見交換は校長としての絆をなお一層強くする結果となった。この内容については第18回栃木県中学校長研究大会で川西中の関谷隆郎校長が発表し、共感と呼んでいる。

本会は本来の研修と同時に社会人講師を招いての講演会開催にも力を入れている。小学校長会と共に本年度は「私の生きかた」の演題でホテルニュー塩原の岡部瑞穂専務を講師に招き、社会人の視点から教育を見詰める話に大いに得るところがあった。同時に夏季休業中の1日、研修と共に先輩校長を招き、先達者としての生き方等について酒を酌みかわしつつ宿泊交流を温めている。

当面の課題は山積し、その解決は永効まで続くであろう。変わるもの、変わらざるものを見据え仲間と共に進もうと今、我々は決意を新たにしている。

海外研修視察記

オーストラリアの教育事情

1. はじめに

教育課程審議会が中央教育審議会の審議のまとめを受け、これからの学校教育の在り方について議論を重ねている最中、平成8年度文部省教員海外派遣の一員として9月30日から10月15日までの16日間、オーストラリアの教育事情視察の機会が与えられました。誠に幸いです。ご案内のとおり、現在わが国はかつて経験したことのないような大きな変化の中にあります。このような変化は教育を取り巻く様々な環境にも少なからず影響を与えています。そこで、私はその機会に、オーストラリアにおける現状を探るべく、研修をしてまいりました。

今年度から海外派遣の要項が若干変わり、一箇所に長期に滞在し、その都市の教育事情をじっくり視察するという「長期滞在型」になりました。

2. 視察の概要

訪問地は、ブリスベン、メルボルン、ホバートとシドニーの4都市でした。中でも中心はホバート市でありました。

ホバート市はオーストラリアで一番南のタスマニア州の州都であります。人口17万余で漁業の盛んな町です。わが国の遠洋漁業が基地にもなっているとのことでなんとなく日本の匂いがする町でした。私はここで、教員委員会をはじめ、小、中、高やマリンディスカバリーセンターという海洋実修センターを視察しました。

最初に、タスマニアの教育について申し上げます。タスマニア州には小学校が151校、中学校が34校、就学前児から16歳までを対象として教育するディストリクトハイスクールが26、我が国の高校2～3年生を対象とするカレッジが8、それに特殊学校が17校あります。

ご存じのとおり、オーストラリアは連邦制をしているので、教育は勿論のこと、州政府が管轄する分野は多岐にわかっています。特に教育については高等学校までは州政府の責任において行わ

足利市立西中学校長 保々政司
れています。

オーストラリア全土について同じことが言えると思いますが、タスマニア州はアジアの範囲にあるという考え方がねずいており、アジアの言葉（日本、韓国、中国、インドネシア等）を小学校から履修しています。私が訪れた学校はいずれも日本語を勉強していました。

現在抱えている教育課題は

- (1) 各学校をできるだけ自主管理させたい。学校の独自性を尊重したい。このほうが父母の意見も反映される。政治家も同じ意見を持っている。
- (2) 読む、書く、計算をするといった基本的な能力に欠ける子供が増えている。これらのことを少しでも向上させたいと願いから、統一テストを行っている。
- (3) 反面、特殊な能力や才能を伸ばす教育にも力を入れたい。

次に学校訪問の感想を申し上げます。

どこの学校でも環境に関する内容を必修として学習し、特にホバートは漁業の町ということから、海洋や水産学等をマリンディスカバリーセンターと連携し、実習体験をしている。又、情報教育を重視し、コンピューターがどの教室にもあり多に活用されていました。日本語教育も盛んで小学校での歌やゲームによる学習や高等学校での習字の授業等共に活動し、楽しいひとときを過ごしました。

3. おわりに

学校訪問や答礼懇親会等をとおして、明るくおおらかで、飾らないオーストラリアの人たちと触れ合うことが出来ました。そして、広大な国土、豊かな自然、古さと新しさがマッチした町並み、どことなくゆったりとした人々の生活ぶりが目につきました。最後にこのような素晴らしい体験をさせていただいた関係各位に感謝申し上げます。